

# 武州みたけ

第五十九号

## 「朝のおいぬさま」

本殿前に置かれている木製のおいぬさま。早朝は正面から当たる太陽によって、身体の様子が鮮明に映り、美しいフォルムも強調されます。

朝陽を浴びて気持ちよさそうな表情を見ると、素敵な一日が始まりそうな予感があります。（写真・文 鶴巻育子）

## 御挨拶

宮司 須崎 裕

御嶽山の短い夏は、足早に過ぎ行き、早くも秋が顔をのぞかせた。社務所の外に見える木々に眼をやれば、色づき始めたモミジの葉がみえはじめ、この社報『武州みたけ』が皆様方のお手元に届く頃には、今年も素晴らしい紅葉の季節となるだろう。

嘉永七年（一八五四）時の老中阿部正弘は、遂に歴史的な決断、日米和親条約を締結し、三百年という長きに亘った鎖国を終焉させた。それから一六八年、我が国は目覚ましい発展を遂げ今日に至った。今では、多くの国々より毎日数えきれない旅行者やビジネス関係の人達が出入国する国となり、諸外国との貿易はますます増えるばかりである。

そんな中、何処からか何によってか解らぬうちに、新型コロナウイルスと云う感染症が瞬く間に全世界に広がってしまった。この想定外の出来事により、令和二年、三年、四年における我が国の観光事業は未曾有の危機に直面し、観光客は消滅し、経済は大打撃を受けた。国を挙げての予防対策により、厳しい生活を余儀なくされた三年間であったが、ようやく感染も収束に向かいつつ平常の生活を営むことが出来るようになったかと思つた矢先、感染力の強いオミクロン株の派生型「BA・5」の広がりと、まだまだ先の見えない不安の続く令和四年御嶽山の初秋である。

ここに、講中、崇敬者各位の益々のご健勝、ご発展を心よりお祈り申し上げます。次第であります。



## 令和五年 大口真神式年祭

毎日祭 『大口真神ご神像』拝観

期 日 四月十五日～五月二十一日

時 間 七時・十一時・十三時・十五時

昇殿参拝料 二〇〇〇円

## 大口真神式年祭

「大口の 真神の原に降る雪は いたくな降りそ 家もあらなくに」

万葉集にオオカミ（真神）の枕詞として「大口」が詠まれている。古来より人々は、狼を神として崇め、畏敬の念を抱いていたことが伺われる。社伝によればその昔、日本武尊の東夷御討征の砌、この地に陣をはり、軍を進められしに山路の險阻なる處にて邪神の妖霧に犯されて道を失ひ給ひし時、何処からともなく二匹の狼が忽然と立現はれ御案内に立ったため、ご災難を免れたことに尊は大いに喜ばれて、お前達はこれより御嶽大神の御使者として神社に留まり、火難・盗難・諸災退除の守護神となり世の民草を救ふべし、と仰せられしによつてお祀り致しましたのが所謂「お狗様」として有名な大口真神であります。

その大口真神の御神像（オオカミ像）を来年令和五年四月十五日より五月二十一日迄の三十七日間、御本殿外陣に御遷座を願い、一日四回御扉をお開き申し上げ、多くの人々がその御神像を拝観により、ご利益を授かるよう毎日祭を斎行する十二年に一度の佳節の年を迎えます。

この記念事業として、御嶽神社参道入口の朱塗りの大鳥居の塗り替え工事を始め、期間中五月八日の例大祭には、文化財指定の神輿の渡御による祭典を執行、宝物殿では、お狗様特別展、神楽殿にてお狗様写真展を企画、また野点とお琴の会、あるいはオオカミの護符の上映会、そして戌の日にはお狗様特別祈願日として愛犬の健康・長寿のお守りとお祓い、さらには十二年に一度の期間限定の御朱印の授与など、皆様をお迎えすべく様々な催事を考えておるところでございます。

この式年祭が盛大に滞りなく斎行出来まう様、神職一同鞠躬尽瘁神明にご奉仕申し上げます所存であります。

多くの皆様のご参拝お待ち申し上げます。

令和四年 長月



# 大口真神式年祭催事

当社では十二年に一度、卯年に当たる年に大口真神式年祭を斎行します。

卯年は方位に表すと「東」、「卯方」にあたり日の出の方向を指します。卯方は、夜明けの清らかな日の光で希望と活気にあふれる方位となり、まさに、日本武尊を光明なる神力により助けたとする伝説につながり、大口真神を斎い奉るにふさわしい年となります。この式年祭にあたり、大口真神のご神徳を輝かしめ、世の平和と安寧、講中・

崇敬者皆様の家内安全・商売繁盛・厄難消除をお祈りいたします。

式年祭期間中は、多くの行事を予定しております。皆様とともに楽しみ、そしてご神威に感謝し、ご神徳のご縁を結ばれますようご案内申し上げます。詳細については、年明け早々に、ホームページ等で発信致します。ご不明な点がありましたら、神社々務所までお問い合わせ下さい。



令和5年4月15日(土)  
会場：ビジターセンター



お茶券：一枚 500円  
会場：神社 宝物殿前

○「オオカミの護符」・・・午前・午後の二回上映予定。(無料／自由席)  
同日〓小倉美恵子「幻燈がたり オオカミの護符」(三十分) 小倉美恵子×鶴巻育子×須崎宮司「御岳山を語る(仮)」・・・十九時(無料／自由席・要予約)

○TEAM 励風「大口真神」演劇公演  
―日本武尊と大口真神のものがたり―  
五月二十日(土) 十九時三十分 神社

○わんちゃん大祭(戌の日)  
四月二十二日・五月十六日 十時執行  
一頭：三〇〇〇円／三十頭まで  
申込多数の場合は抽選になります。  
(要予約 来年三月より／CXLなし)

## 行事予定表

4月15日(土)	「オオカミの護符」上映会+小倉美恵子さん講演会/ビジターセンター(予定)
4月22日(土)【戌の日】	わんちゃん大祭 10時(※要予約) 野点と琴演奏もあります
4月23日(日)	野点と琴演奏もあります
5月7日(日)	日の出祭(宵宮)
5月8日(月)	日の出祭(神輿渡御)
5月13日(土)、14日(日)	野点と琴演奏もあります
5月16日(水)【戌の日】	わんちゃん大祭 10時(※要予約)
5月20日(土)	Team 励風 公演「大口真神」19時30分
7月8日(土)～8月27日(日) 10月28日(土)～11月26日(日)	絵画・造型物「想像された狼たち展」(※開催期間は予定です)



撮影：青柳健二



徳川綱吉公奉納の神輿  
(青梅市指定文化財)



武蔵御嶽神社おいぬ様  
期間：四月～五月  
会場：神楽殿にて



御師家のおいぬ様  
期間：4月～12月  
会場：宝物殿

○写真展『みたけのおいぬ様』  
写真家・鶴巻育子

○企画展「お狗様信仰(仮)」  
宝物殿一階にて、御嶽のおいぬ様信仰について、御師の活動にもスポットを当てご紹介します。

○『想像された狼たち展』

夏期：七月八日～八月二十七日

秋期：十月二十八日～十一月二十六日

宝物殿にて(令和5年4月～令和6年2月まで)  
鶴巻育子 写真展「みたけのおいぬ様」  
企画展「おいぬ様信仰」  
神楽殿にて(式年祭期間中)

青柳健二 全国のおいぬ様写真展  
「『お犬さまの肖像』―日本の狼信仰と狼像―」



## 最後のオオカミと



奈良の東吉野に、オオカミの像がある。

それが記録に残る「最後のニホンオオカミ」の証しだと聞いて、ぼくはいてもたってもいられなくなった。山溪が深く刻まれた吉野の地は、山はもちろん川が美しい。そんな山河を駆け巡ったであろうオオカミの等身像があるのは、すぐそばを高見川がせせらぐ清らかな場所。印象的だったのは、山に向かって吠えているような姿だ。ここに最後のオオカミが存在したんだという誇りのようなものを、かつて仲間と暮らした山中に向けて叫んでいるようだった。

じつは、蔵王権現発祥の地であり「金の御嶽」と呼ばれる吉野にはたびたび通っている。そのきっかけは、ほかでもない東京の御岳山であり、山に祀られる大口真神の

存在だった。初めて御岳山と大岳山に登り、武蔵御嶽神社を参拝し、そこに神格化したオオカミを見たときの衝撃は、いまでも色褪せることなくぼくの心に記憶されている。よもや現代の大会・東京で、オオカミを信仰する文化が存在するとは……。加えて、神代の世の物語まで伝わっているではないか。歴史を辿る山旅を楽しんでいた当時のぼくにとって、それだけで御岳山が特別な山になったし、ひいては東京を、そして日本を、もっと知りたいと思ったのだった。

オオカミを祀る山に関心をもったのも、そういう経緯からすれば当然のことだったのかもしれない。以来、奥多摩や奥秩父と

## はじまりのオオカミと



いったニホンオオカミがたくさん棲息した山域をはじめ、ほかの地方にも「狛オオカミ」を探しにいったことがある。神となったオオカミは「大口真神」と呼ばれ、魔除けや農業の神として護符や木札にその名が記されたためられていることが多い。御岳山の山内や多摩地区の農地・民家の軒先などで見かけたという人も多いことだろう。

ついでながら、静岡の山住神社に伝わるオオカミの逸話が面白かった。世は徳川家康のころ。甲斐の武田信玄に三方ヶ原で敗れた家康が山に逃げ込んだ。すると、追ってきた武田勢に向かって突然おきき地鳴りが起こったという。驚いた武田勢は逃げたそうだが、その地鳴りの正体こそ無数のオオカミの遠吠えだった。果たして窮地を

救ってくれたオオカミを、家康は大切にしようと伝わる。ちよつと怖い存在でありながら、こうした「オオカミが危難を救ってくれた」という伝承は意外と多い。御岳山における日本武尊もそのひとりである。

そんなわけで、いま「低山トラベラー」を生業に日本各地の低い山を旅する大きな転機のひとつになったのが、まさに御岳山。この神なる山がなければ、いまの活動はないのだから、その意味ではぼくにとって「はじまりの神」だといつもいいだろう。いまでは、新しい取り組みがはじまると必ずお礼に訪れる大切な場所になったのだから。（文と写真・大内 征）



おうち せい  
大内 征  
低山トラベラー  
／山旅文筆家

土地の歴史や物語を辿って各地の低山を歩き、自然の営み・人の営みに触れながら日本のローカルの面白さを探究。ビークハントだけではない。知的好奇心をくすぐる山旅・の楽しみ方とトレイルを歩くことの魅力について、文筆と写真と小説で伝えたい。

二〇一六年よりNHKラジオ深夜便「旅の達人」低山を「目指せ！」にレギュラー出演中。NHKBSプレミアム「つばし百名山」では雲取山と王岳・鬼ヶ岳の案内人として出演した。著書に「低山トラベラー」、『つとておきき低山トラベラー』(ともに「見書房」)、『低山手帖』(日東書院本社) などがある。NPO法人日本トレッキング協会常任理事。宮城県出身。





御岳ビジターセンター

# ムサくんだより

## 「季節を知らせる声」

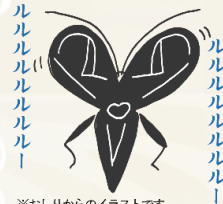
少しずつ肌寒くなるこの季節。御岳山には秋を知らせる「声」が響き渡ります。その「声」とは、森で暮らす生きものたちの「恋の声」。今回は、この時期に気になるさまざまな「恋の声」をご紹介します。

あなたは、これまでの人生で誰かに恋の声（ラブコール）を送ったことはありませんか？

ラブコールは一生に一度伝える方もいれば、毎日伝える方もいるでしょう。森で暮らす生きものたちも同じです。

まず昆虫であるカンタンは、草地の中で「ルルルルルル」と麗しい声と香り（誘惑腺）で女子に呼びかけま

す。人間でいう口説き文句と香水のようではないですか。自分を素敵に見せることは虫の世界でも一緒なのですね。



※おしりからのイラストです

次に御岳山で聞こえる「恋の声」は、ニホンジカ。実際には複数の女子



と過ごす縄張りを他の男子に知らせる声です。日が沈んだ後、暗闇に響く「フィーヨー」。俺の女子たちに手を出すな……とても叫んでいるかのような高い声。この声が私にはいつも女性性の叫び声に聞こえて、一瞬緊張が走ります…。

最後は、御岳山のアイドル、ムササビの「恋の声」。

ムササビは、複数の男子が女子の自宅（巣穴）を訪れ、出待ちをします。

そして自宅の前で尻尾を揺らしながら「グルルルル」と語りかけるように鳴きアピール。

女子から見えないのでは？というところで尻尾を振り回し女子へのアピール行動をする男子やしきりに木から木へ移動する

男子と、なかなか忙しない男子たちです。

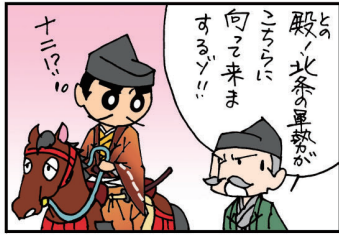
## グルルルル



秋の夜長、森に出かける機会があればぜひ生きものたちの「声」に耳を傾けてみてください。ドラマチックな場面に遭遇するかもしれませんよ…？

# みたけの重忠くん

作 たいやきジロー



## 大口真神式年祭

### 御奉賛のお願い

昨今の自然災害、世界的な疫病の蔓延、戦争など私達の生活を脅かし、誰もが先の見えない不安を抱えるこのような時こそ、諸災退除の守護神である大口真神の御神徳を輝かしめて、世界の平和と安寧、そして講中崇敬者皆様の家内安全・商売繁盛・厄難消除を祈念する「大口真神式年祭」がいよいよ来年、令和五年に催行されます。

現在その準備のため、修理事業および境内整備等を順次進めております。現在は、宝物殿 国宝収蔵展示ケース、国宝・赤糸威鎧修理事業、皇御孫命社玉垣修理事業を進めており、今後は中野烏居塗り替え工事、産安社修理工事、宝物殿湿気対策工事、避雷針設置工事等を予定しております。

皆様の深いご理解とご信仰を賜り、心からの御奉賛を仰ぎたくお願い申し上げます。

御奉賛 一口 二千元

## 徒然ばなし

## 『何足の草鞋?!』



権瀬宜 久保田 享

私が、この山に戻って早二十年がたちました。神社に奉仕し、わが家の宿坊でお客様をおもてなし、消防団に属し、観光については、御岳山観光協会の理事として、会長・副会長のもと、イベントに参加し、いくつかの役をはたしています。今回はこの観光協会について少しお話ししたいと思います。

御岳山観光協会は三十一軒の宿坊や売店で構成され、宿泊客や売店の利用客など観光客の誘致を目的とした活動を行っています。

夏には野外での昔語りや、昆虫の観察、コンサート等を行い、秋には芸者、忍者、冬にはマラソン大会などの体験イベントを実施しています。その際には舞台の設営や案内などやる事は山積みです。大変ですが多くの観光客に御岳山に来ていただくことは、現在山に暮らす私たちの生活に潤いをもたらすだけでなく、将来山を支えてもらう若者たちの生活の土台をつくることにもつながるはずで

す。御岳山に限らず、昨今、日本全国の自営業では深刻な後継者不足に苛まれています。私は、山の若者たちには一度山を下りて生活し、外の世界を知った後、山に戻って下界で身につけた多くの新しい技術を山にもたらし貢献してほしいと思っています。若者たちが山で働き、定住するためには、御岳山全体の経済力を高めて仕事を増やし、労働環境を整えなければなりません。簡単なことではありませんが、御岳山の未来のために絶対不可欠であり、私の世代の責務だと考えています。観光協会のさまざまな活動はその第一歩なのです。

とまあ、使命のある仕事ですが困った事もあります。それはイベント等行う日程が集客を見込める日程なので、自分の家も忙しい事が多いのです。そのための対応として家族に高校生や大学生くらいの年齢の子供がいると、給仕や片付けなどを手伝ってもらい、家のためだとタダ働きさせて人件費を浮かせる事が出来ます。山の子供たちはそうやって社会の理を理解し、成長していくのです。

長くなりましたが、皆様が御岳山のイベントに参加される事がありましたら、そんなことを思い出していただければ幸いです。

## 新任あいさつ

新任本務員 久保田 卓也

この度七月より父に代わり、武蔵御嶽神社に奉仕させて頂く事になりました久保田卓也と申します。私は高校や大学は一般の学校に通っており、また神主を継ぐ前は一般企業に勤めておりました。病院で看護補助として働いたのを始め、配達業や工場などで働かせて頂いておりましたので、神社に奉仕されている皆様と違い、神主としての経験また知識がほとんど無く、全てを一から学び直さなければなりませんでした。その様な状況でしたので、正直神主として生きていく勇気がわかず、後を継ごうかどうか非常に迷っていました。しかし今まで育ててくれた父の神主を継いでほしいという願いや、今まで十六代続いてきたものを終わらせるわけにはいかないと思い、十七代目の久保田家の神主として後を継ぐこととなりました。

神主として奉仕させて頂いてから早一ヶ月以上が経ち、何をしてもぎこちない私ではございましたが、先輩の皆様は暖かく迎え入れてくださり、初歩の初歩から懇切丁寧に指導してくださっています。そのおかげで少しずつではございますが神主として今後奉仕させて頂いていく自信がついてまいりました。そんな皆様のためにも一日も早く一人前の神主となるよう努力してまいります。

また、一般企業で働いた経験をいかし武蔵御嶽神社に自分なりの貢献ができるよう考えていきたいと思っています。

最後になりますが、講中や参拝者の皆様には経験の無い私を見て不安に思われるかと思いますが、精一杯精進してまいりますので何卒宜しくお願いします。







## 畠山重忠の実像寸描

## ―「古今著聞集」と「源頼朝袖判書状」―

大河ドラマの影響で畠山重忠が注目されます。武蔵御嶽山と重忠伝説の現在最古の記述は、四代將軍徳川家宣の儒臣、新井白石の古武器古証の先驅、宝永六年（一七〇九）卒の「本朝軍器考」です。「秩父御嶽山二ハ畠山庄司重忠ノ鎧アリ」と簡單ですが全国の名甲を展望しての当代屈指の考証學者の發言です。御嶽山と重忠のゆかりは、信すべき甲冑と共に古くから伝承されているのです。

さて、平治の乱の四年後、長寛二年（一一六四）に畠山庄司重能の子として生まれた重忠の伝は、鎌倉幕府の編年日録「吾妻鏡」討死の元久二年（一二〇五）六月二十一日の条の地の文に、生年四十二歳と記述され、ほぼ十七歳から四十二歳まで幕府の沿革事件を通じて語られます。

「吾妻鏡」は、正応・嘉元（一二九〇～一二〇四）年代に編集を終えたといわれます。後半の北条執権家の一族の編集ですから、いろいろ付度があつて苦心した跡を感じます。引用の原史料はともかく、地の文は注意して読む必要があります。もとより「吾妻鏡」は重忠にとって第一級の史料ですが、今回は「吾妻鏡」成立以前で、先入観なく

重忠が登場すると思われる文献を読みます。

まずは、鎌倉時代に最も充実した説話文學の傑作「古今著聞集」巻第二十・七十三話の「力士と重忠」の話です。「古今著聞集」は「吾妻鏡」より半世紀程早い建長六年（一二五四）成立で、作者は鎌倉幕府とも関係の深い京都の公卿西園寺家に仕えた文人橘成季です。この成季が「著聞集」の成立ちかくに、同じく西園寺家に属した安芸國の地頭に下向した御家人、小早川茂平から鎌倉御家人関係の説話を十篇あまり採話したとされます。小早川茂平は、頼朝挙兵以来、側近に仕えた御家人の土肥実平の曾孫で、土肥家に伝承された逸話でしょう。いずれも、当時の雰囲気と実感をよく伝えます。重忠の大力は「吾妻鏡」建久三年（一二九二）九月十一日の条に「丈（三メートル）の池石を一人で運んだとありますが、それよりもこちらの方がずっと自然で現実感があります。一方に頼朝を登場させ、その性格、挙措の描写が対比的に描かれ、重忠の人格を際立たせて効果的です。原話がよくその情景を伝えていたので、頼朝の重忠への会話を頼朝にとつての重忠の存在の重ささえ感じさせ

せるのです。単なる力持ちの話しとも思われません。では「古今著聞集」巻第十「相撲強力」の部、十三篇の中の十一篇目「畠山重忠、力士長居と合ひて、其の肩の骨を折る事」を読んでみましょう。

設定年代は建久元年冬、正二位の頼朝が上洛し右近衛大将に任官した、翌建久二年（一一九二）以降です。頼朝は四十五歳から五十二歳代。正二位前右近衛大将です。一方重忠は「吾妻鏡」元久二年（一二〇五）六月五日、討死の条に四十二歳とあるので二十七歳から三十四歳の間、無位無官の武蔵國の名家（「高家」の当主です。年齢的にも、官位官職でも全て頼朝には頭が上がない主従関係です。話し筋はこうです。頼朝の会話のみ引用し、後はあらすじで注目すべき語りに「」をつけてあります。

「鎌倉前右大将家」に東八力國で一番の大力の長居という相撲取りがやってきて、「私以上に強い相撲取りはいない。いるとすれば「畠山庄司次郎」だけだ。しかしたやすく負けはしません。」などと大言壮語した。「大将（頼朝）」は、どうも面白くない。そこへ水干姿の重忠が参上し、侍所にすでに居並んだ大名・小名たちをかきわけて、最も上座にどつしりと座を占めた（この辺は武蔵國の高家の当主の貫禄がよく出ています）頼朝は「なほ近く、それへそれへと」招いたが、重忠ははじめの

座を動かずにいた。頼朝はすぐには言い出さず、雑談してから「そもそも所望の事の候を申し出さむと思ふが、さだめて不許にぞ侍らむずらむと（きつと承諾なさらぬだろうと）おもひたまひながら、又ただにやまむも忍びがたくておもひわづらひたる」と何遍もくどくど遠慮がちに仰るが、重忠は返事を申し上げずにいる。何遍も言われるので、重忠は「ちと居なほりて」（きちんと座り直して）それほどのお望みならば、と承諾すると「大将」はお喜びで「その庭に、長居めが候ぞ。貴殿と手合をして心見はよと申候也。東八力國打勝るるよし自称仕まつる、ねたましうおぼえ候へば、頼朝なりともいでて心み給へ」と言われたので、重忠は思いもよらぬことと黙っている。大将は「さればこそ。これは我が身ながら、非合（失礼）なことをお願いしてしまった。しかし、是非にお願いだ」というので立上り、きちんと身支度をして長居と立会うが、相手に少しの手出しもさせず、なんなく長居の肩を押さえつけ、動けないようにしている。梶原景時が「勝負は見えました。そこまです。」と判定する。しかし、頼朝は勝負を付けよというので重忠は、長居を押しつぶすようにしてひっくり返した。重忠はそのまま座に戻ることもなく、物も言わず立ち去ってしまう。死んだかと思われた長居は、それでも命は取り留めたが肩骨を砕かれ廃人に



なつてしまふという後味の悪い話しです。重忠の武勇を示す話ですが、実は相手を傷つけるかもしれないという力量の差も早くも見抜き、さらに勝負をしたら主人が何を要求するかも見通してなかなか立ち会わない重忠が描きだされるのです。

一方、頼朝の重忠に対しての謙つ

## 【翻刻】

(源頼朝の花押)

あすは、こふのこなたに  
ちむのはらといふところ二  
御すく候へし、いくさたち二ハ、  
こふにはすくせす申  
なり、かまへてひか事すな、  
あかうそ三郎を、やうく二  
せん二こひたるもの、つい  
ふくしたるなり、たうしハ  
ほうてう・庄司次郎ハ、  
けふのひくわん二いらす、しむ  
へうなり、このくにハきはめ  
てしむこくなり、かまへてく  
くしたるもの

らうせきすな、御人とも二、みな  
ふれまわすへし、けふらう  
せきしたるものともは、  
こさたあるなり、けふの  
ひくわん二いらぬほとに、あすの  
すくにいてりなんハ、あこん  
のことにてあるへきなり

八月十五日

(平盛時)  
盛時奉

(畠山重忠)

庄司次郎殿

『源頼朝袖版平盛時奉書』【島津家文書】

原資料：東京大学資料編纂所蔵

翻刻資料提供：埼玉県立嵐山史跡の博物館

文治5年(1189)8月15日付、阿津賀志山(福島県伊達郡国見町)の合戦に勝利し、乗じて軍勢が乱暴狼藉を行わないよう監督することを重忠に命じた文書です。袖に頼朝の花押。

た丁寧な執拗ささえ感じさせる会話が写實的に記述されます。「これへ、これへ」とか対称「そこ(あなたに)手こひ申すぞ(お願い申すのだ)」とか「是は我ながら、非合の事にて候(私としたことが、とんだ失礼を)」など、年長で高位の主人とは思えない、この会話の謙譲や尊敬の語法に注意して下さい。頼朝の自分の主張をどうしても押し通す粘液体質と饒舌に対して描写される重忠に、自然に清冽さを印象づけます。「これへこれへ」など招いた高貴の主人頼朝に、挨拶もせず物静かに立ち去るところがクライマックスです。そして対比して起る後味の悪い気分を頼朝に残すことになります。大力を讃嘆できなかった隘路には効果的です。単なる誇張された「大力」譚ではありません。これはまさしく、その場にあった人物が、鋭利な視点と感情で切り取った素材を、それを受けての再構成の成功です。すぐく自然に歴史上の人物を人間として描き出した名作でしょう。

この作品で気になるのは、力士が発言の中で重忠を「畠山庄司次郎」と呼び、また地の文で頼朝を「大將」と呼称している点です。後世の人なら、重忠とか頼朝とかするところです。当時は本名(諱名)は呼称しないのが普通で、こういう職名や仮名で呼称したのです。当時の自然な会話が取り込まれているのです。

頼朝を「大將」とした呼称は、「安貞元年(一二二七)十二月二十二日、関東御教書案」(鎌倉遺文)古文書編三七〇九)でも使われています。当時の使われ方と思われます。庄司次郎は「著聞集」の同じく六九八話で、重忠の討たれた年を記憶しているという、しみじみした使われ方をしています。「吾妻鏡」では、次郎重忠ですが、在世當時は「庄司次郎」が一般であったようです。(ちなみにこれは、畠山庄の領主の次男という肩書きのような仮名です)

この名称の重忠は、「文治五年(一一八九)五月十五日源頼朝袖判平盛時奉書」(島津家文書)にあります。奥州征伐に先陣として睦奥国の国府(多賀城)に進軍した北条と重忠の国府への侵入をさけ、狼藉をさせなかった事を「神妙である」と褒めた上で、なお重ねて狼藉禁止の励行を求めた。陣中で緊急に頼朝が口述し、右筆に軍記させたその慌ただしさと臨場感を伝える文面です。急いで文面を訂した跡も残り、さらに頼朝自身が文頭(袖)に花押を据えた貴重な文書です。頼朝は文中で「北条氏」は「北条」、重忠は親しげに「庄司次郎」と仮名で呼びかけます。宛名も「庄司次郎殿」です。戦時の慌ただしさの中に重忠への頼朝の戦士としての期待と、且つ花押を据えた細心さ、軍陣での頼朝と重忠との親近を感じさせるところがあり、「古今著聞集」の頼朝からの会話の雰囲気

に似たものを感じます。難解な部分があるのですが、戦時、緊急の中での心遣い、気持ちを伝えようとする臨場感ゆたかな中世文書です。

重忠は多くの記述の場合立派な、あるいは美しい人格を先入観としてしまふものが多すぎるように思います。優れた説話に、ごく自然ななりゆきの中で、誇張無く描き出された頼朝と重忠。奥州征伐進軍中の頼朝の火急の、難解なところもある書状に、重忠と頼朝の距離感を指摘してみました。

なお、「古今著聞集」は岩波古典大系本の三八〇話をご覧下さい。文治五年五月十五日「源頼朝袖版平盛時奉書」は「新編埼玉県史・史料編五・中世I」に翻刻文があります。最近では二〇一二年に横浜市歴史博物館展示「畠山重忠」展図録にきれいな写真が載っています。この展示には青梅市郷土博物館の模造赤糸威鎧や、御嶽山の宝寿丸黒漆鞘太刀が出品され評判でした。この文書も多くの方がご覧になったかもしれません。仮名で走り書きの中世文書です。「古今著聞集」と土肥氏の小早川茂平、その説話との関わりは、和田の乱での三浦氏の裏切りとののしった歴史的な説話を中心に話題とした一九七〇年代以降の新しい中世武士成立論の巨峰、石井進氏の『古今著聞集』の鎌倉武士たち(鎌倉武士の実像)平凡社選書・一九八七年・所収)の学恩です。

## 神社の杜（五十九）

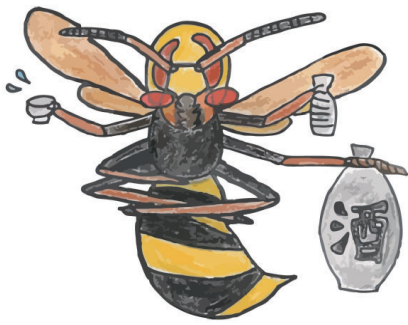
## 『フエンドウ』

片柳 茂生

「フエンドウ」これは御岳山の方  
言なのですが何のことかわかりま  
すか？

フエンドウとはオオスズメバチの  
事、スズメバチの仲間の中でも日本  
で、いや世界で一番大きな蜂です。  
体長は働きバチが約4センチ、女王  
バチになると5センチを超えます。  
スズメバチの中でも最大最強の蜂で  
凶暴性、毒の強さも一番で、刺され  
ると死に至ることもあります。

オオスズメバチの事をクマバチや  
クマンバチと呼ぶ地方はあるよう  
ですが、では何故御岳山ではフエ  
ンドウなのでしょう。フエンドウとは、  
「笛の胴」が訛った言葉のようで、



イラスト：御岳ビジターセンター解説員

つまり横笛の太き位大きな蜂とい  
う意味らしいのです。

冬の間たった一匹で過ごした女王  
バチは、春も盛りになる頃に活動を  
始めます。まずは巣の候補地探し  
(巣は主に地中)、この時飛び回るフ  
エンドウの羽音はまさに重量級の迫  
力です。ミツバチの羽音を小型飛行  
機と表現するならば、フエンドウは  
大きなジェット機って感じでしょう  
か。低空で飛び回るフエンドウは羽  
音もさることながらその大きさは圧  
巻です。でもこの頃のフエンドウは  
余程の事が無い限り人を襲う事はな  
く、静かに見ているだけならば刺さ  
れることはまずありません。攻撃的  
になり怖くなるのは、夏から秋にか  
けて巣が大きくなり働きバチも沢山  
出現する頃になってからです。

ビジターセンターに勤めていた時  
に大変な事が起こりました。解説員  
は、子供たちを連れて観察会を行う  
ときにある注意をします。それは、  
「スズメバチが身の周りに来たらお  
地藏さんになりなさい、じっとして  
れば蜂は何もしないから」と。しか  
しながらある時、子供が林の中で

しっこをしていた時に「たすけてー」  
という大きな声、行ってみるとお地  
蔵さんの格好をした子供の周りには  
フエンドウが数匹飛んでいます。子  
供は教えられた通りにじっとしてい  
ます。その近くにはフエンドウの巣  
があり、威嚇していたのです。通り  
すがりの蜂と巣の近くの蜂では状況  
が全く違います。急いで子供を抱え  
その場から退散したので事なきを得  
ましたが、何とも恐ろしい体験でし  
た。お地藏さんも時と場合では助け  
にならないことを実感しました。

御岳山にはもう一種怖い蜂がいま  
す。酒宴の時に現れ、酒量が一線を  
越えると豹変し、くどくどと同じこ  
とを繰り返す、しつこく、そしてう  
るさい人、このような人を御岳山で  
は親しみを込めて「クドンバチ」と  
呼んでいます。ある意味、フエンド  
ウよりクドンバチのほうが怖いかも  
しれません。酒宴の席では近寄らな  
いように。もし近くにクドンバチが  
来たらお地藏さんの格好？いや、こ  
のしぐさに効き目は無いと思いま  
す。悪しからず。

## あ と が き

大河ドラマ『鎌倉殿の13人』。武力や  
知性のみならず、所作からにじみ出る圧  
倒的な見栄えで画面を彩った中川大志演  
ずる畠山重忠。なかでも赤糸威の大鎧を  
着用し躍動する姿には感動しました。当  
社宝物殿の前に立つ「清廉の武将畠山重  
忠」像は、長崎の「平和祈念像」を筆頭  
に平和を祈り続けた彫刻家・北村西望の  
制作です。コロナ禍のこと、隣国のこと、  
信じ難い諸々のことがあります、重忠  
のように謹厳実直に生き、日々平和を祈  
るばかりです。

最後に、この半年間を無事に過ごせた  
ことを御嶽大神に感謝し、毎年丁寧に教  
授下さる先生方へご奉納頂きました皆様、  
各種祭典や行事に御協力・御協賛下さい  
ました崇敬者の皆様、各所関係機関の皆  
様に厚く御礼申し上げます。また、大内  
征様、齋藤慎一先生、鶴巻育子様玉稿を  
有難うございました。

令和四年 九月二十日発行

編集 武蔵御嶽神社

TEL 〇四二八 (七八) 八五〇〇  
FAX 〇四二八 (七八) 九七四一印刷 (株)成和印刷  
http://www.musashimitate.jp/武蔵御嶽神社  
公式SNS公式  
ホームページ

HP



facebook



Twitter



instagram